

# 小児肺炎球菌感染症と ワクチン



みね まひと  
〈監修〉 峯小児科 院長 峯 真人 先生

# 肺炎球菌感染症って どんな病気



## 肺炎球菌という菌によって起こる 感染症の総称です。

肺炎球菌は、ふだんから子どもの鼻やのどにすみついている菌です。咳やくしゃみなどによって周りに飛び散り、それを吸い込むことで広がります。

ふだんはおとなしくしていますが、特に6か月齢未満の赤ちゃんに、時に重い感染症を引き起こす場合があります。

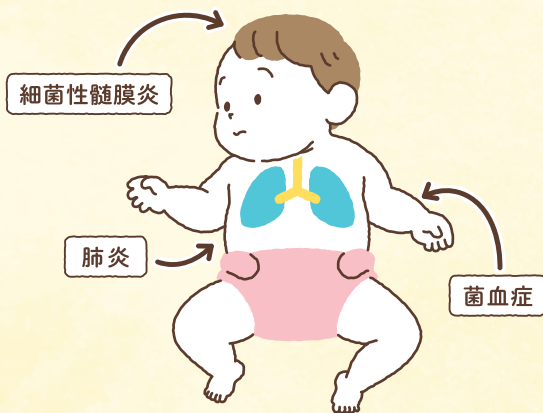
肺炎球菌は分厚い膜に覆われており、体の免疫からの攻撃に強く、中には薬剤が効きにくい菌もあります。

感染すると入院が必要となる場合があります、重症化すると後遺症が残ったり命にかかわったりすることがあるため、注意が必要です。

## 肺炎球菌が引き起こすおもな感染症

### 細菌性髄膜炎

血液に運ばれた菌が、血液と脳の間にあるバリアを通過し、脳を包む膜(髄膜)で炎症を起こす病気。後遺症が残ったり命にかかわったりすることがあります。



### 肺炎

菌が肺で炎症を起こす病気。症状は風邪とよく似ていますが、肺炎と菌血症に同時にかかると重症化しやすく、入院が必要になることがあります。

### 菌血症

菌が血液の中に入りこんだ状態。血液中の菌が全身にまわり、髄膜炎などの重い感染症を引き起こすことがあります。

# 肺炎球菌 ワクチンとは



肺炎球菌による感染症を予防するワクチンです。肺炎球菌に対する免疫をつけることで、感染症の発症を予防します。たくさんある肺炎球菌の型(種類)のうち、重い病気を起こしやすい型による感染症の発症を防ぎます。感染したときに重症になることも防ぎます。

**肺** 炎球菌に対する  
抵抗力(免疫)を  
つけることができます。



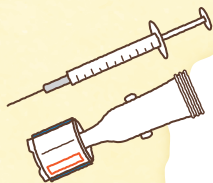
**ワ** クチンの定期接種が始まってから、肺炎球菌感染症の患者数は減っています<sup>1)</sup>。

※2013年4月に定期予防接種開始



**生** 後2か月から接種できます。  
生後2か月になったら、なるべく早く接種を開始しましょう。

**副** 反応の多くが、注射部位の赤みや腫れ、発熱などです。このほかに気になることがあれば、医師にご相談ください。



**医** 師が必要と認めた場合には、ほかのワクチンと同時に接種することができます。接種のスケジュールは医師と相談してください。

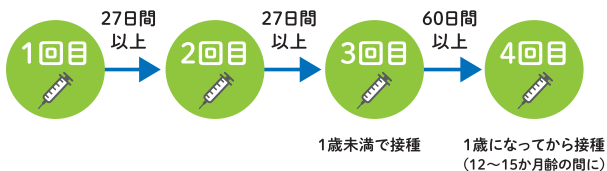
# 肺炎球菌ワクチンを 接種するスケジュールは？

〈標準的なスケジュール〉

最初の3回は0歳児での予防、追加の1回は1歳以降の予防のために接種します。

初回接種開始時の月齢

2～6か月齢



小児の定期接種は、生後2か月以上5歳未満までが対象です。

肺炎球菌による感染症にかかるリスクが高いと考えられる場合は、任意でのワクチン接種が可能な場合があります。

標準的なスケジュールで接種できなかった場合や任意接種に関しては、医師にご相談ください。

# 肺炎球菌ワクチン 接種時に注意することは？

## 接種前は…

- 体調は良いか、熱がないかなど、普段と変わったところがないか確認しましょう。
- 接種の際には、母子健康手帳と、(お持ちであれば) 予診票を記載の上、持参しましょう。



## 接種後は…

- 接種後30分は、医師とすぐ連絡がとれる場所で、お子さんのようすを見守りましょう。
- 注射部位は清潔に保ちましょう。
- 当日は入浴してもかまいませんが、体を洗うときは注射部位をこすらないようにしましょう。
- 接種後に熱が出たり、注射部位が腫れたりすることがあります。熱や腫れが続く場合などは医師にご相談ください。

**この他に気になることがあれば、  
医師にご相談ください。**



